

仏　さ　ま　参　り

—The Loved One 考—

吉　川　道　夫

無数の豚の群が狭い木の囲いの通路を押し合いへし合いなだれ込んでくる。と画面は一転して、工場の出勤時間で、門限に急ぐ労働者の群が通用門になだれ込む。

これは Chaplin の名画 *Modern Times* の冒頭のシーンだ。ただ黙々と通用門に急ぐ労働者を、豚の群と類比させる彼の卓越したアイデアは、成程、我々の笑いを誘うに十分だ。が我々の脳裡に深く刻みつけたこの異様な皮肉な印象に対して、我々は何処にレンズの焦点を合わせるべきであろうか。と言うのは、これは単に映画の上の見事なアイデアと片付けられぬ問題を我々に提供しているからだ。つまり、あの労働者の姿が我々の姿でもあると気付いた時、あながち単純な笑いで済まされない、何か shocking なものを認めぬ訳にいかないのである。それは Chaplin が鋭利な洞察力を持って我々に示してくれた「現代」の一相であるのだし、また「現代人」の一面でもあるのだ。

現代人は豚に類似すると言うより、豚そのものになっているのかも知れない。あの労働者の群は少くとも個性を持つ人間像としては表現されていない。個性を持つ人間は、集団または機械文明という不可避の状況の中に、受身のまま巻き込まれ、個人としては無視されてしまっている。つまり現代の最大特徴である集団性または機械組織という巨大なメカニズムの中に入った個人は、人間としての存在を否定され、豚の集団と類似した群集の一部としか考えられなくなっているのだ。

所で、その反面、我々が日常生活の中であって、如何に自己意識を持てないか、かえって不思議な位だ。一体に集団の中にいる時には意外に安心感を持つものである。これは心理学を態々引き合いに出さずとも、集団の中にいる時には、自我意識が没却されるからでもある。その事を更に押し進めると、自我意識を持とうとしても、集団とか機械組織というメカニズムに圧倒されて、手出しようがなくなってしまうのである。だから、人間はただ盲目的にそのメカニズムにこずき廻され、目的もなくその渦中にうろたえるより他なくなってくる。それを Virgil Gheorghiu は「25時」の中で、「人間が人間であることを止め

た」状態だと言っている。つまり人間が動物的状态に墮してしまったと言うのだ。この事は、また、すでに F. Kafka によっても予言された所だ。例えば、「変身」*Die Verwandlung* がそれだ。Chaplin の映画と同じく、この小説は全く荒唐無稽な物語でありながら、いやに無気味な冷徹な現実感が鬼気迫る様な感じで、我々を戦慄させるのだ。ある外交員がある朝気懸りな夢から眼を覚ますと、自分が大きな毒虫に変っているのを発見する。この異様な架空的設置にも拘わらず、shocking なものを感じるのも、これが一人の人間の珍事ではなく、我々自身いや現代に生きる人間にも関係していることだからである。常規にはまった生活の歯車の中に、人間の主体性を失い、思考を失った人間は、人間である存在を否定された人間であり、いわば、人間でない存在なのである。この様に人間らしからぬ生活を強いられ、人間としての交際を断たれてしまった存在は、Kafka の眼には動物に変身したものと映ったのであろう。

この現代に生きる人間のカリカチュアは、明らかに、人間の悲惨さを如実に示している。Pascal が言っている様に、人間の悲惨さとは動物的状态に沈滞することなのである。つまり、人間が人間であることを止めることなのだ。これはまた宗教的に言えば、人間が人間でなくなることは、つまり神の恩寵の断絶であり、それこそ最大の罪であるのだ。

人間が人間でなくなって行こうとする現代そして現代人に、作家は沈黙を保持している筈はない。Evelyn Waugh (1903-) の「仏さま」*The Loved One* (1948) は、その意味で、まさしくその座標を占める作品である。南カリフォルニアの超現代的霊園の「囁きの園」(Whispering Glades) — 実は Waugh が Hollywood へ行った時、非常に感銘を受けたという Forest Lawn Memorial Park という実在の地のパロディなのだが——を背景にして、現代人の死に対する態度を中心にした諷刺作品である。

20数年前に英国より渡って来て、Hollywood の映画界で最古参のヴェテランの脚本家 Sir Francis Hinsley も、既に現代の激流に逆らえず、ただ名誉のみを固持し、細々と生きている。昔日の勢いも今はなく、宣伝係に位を下げられ、更にその席すら見出せない運命になって、寄る身もなく、ずぼんつりで首を縊ってしまう。彼の同僚のヘボ詩人の英国人 Dennis Barlow も、今は動物葬儀屋に身を下げ、「幸福獵場園」(Happier Hunting Grounds) に勤めている。その Barlow が Sir Hinsley の葬儀準備に、始めて「囁きの園」霊園にやって来る。そこで見る至れり尽せりの施設は、全く滑稽な程の出来具合。入口からして此世天国といった風、何処からともなく流行歌が聞えてくるし、建物

はすべて説明づきの観光館同然。お棺、経帷子、墓地にいたるまで、すべてお金と相談の上で決まるといった具合。W. B. Yeats の Innisfree の詩を模した Innisfree 島では、蟬音まで機械で出されている有様。また死体には死体美容師がついて、如何なる醜い顔でも、見事に美容を施し、その上希望通りの表情までつけるといった手のこんだ技術も紹介される。更に「生きるものすべて死ぬにきまっている」との Hamlet の言葉まで引用して、今度は生きているうちに「事前準備」をと勧誘までされる仕末である。ここでは、死体はすべて「仏さま」(Loved One) と呼ばれ、生きているものは「待ち仏」(Waiting One) と呼ばれる。この様にすっかり現代的な企業形態に則った死体引受けの undertaker 業に、Barlow はすっかり魅せられてしまう。

この霊園の死体美容係の Aimée Thanatogenos (thanatos = death; genos = clan) は、同じくここで働く葬儀学部の死体美容の学位まで持つ有能な Joyboy から愛されることになる。一方、Barlow もこの女性に偶然会ってからは、詩集から詩をせせと写しかえて、彼女の所へ送り、彼女の欲心をとらえる様になり、ここに奇妙な三角関係が成立する。彼女はこのディレンマを解決する手段として、ある地方新聞の身上相談「グル・ブラーミンの叙知」(The Wisdom of Guru Brahmin) を頼るのであるが、これまた実に当にならない金儲けのインチキ身上相談である。彼女の信用していた Joyboy も、彼の家へ行って始めて分る当て違い。その上、Joyboy の母親の可愛いがっていた鸚鵡が死んだことから、Barlow が彼女が非詩的な場所と思って軽蔑していた動物霊園の秘書であることが分り、どちらも信じれぬ様になってしまう。所が両者ともから結婚申込みを受けるに至って、最後の手段と身上相談の Slump に電話をかけて相談するのであるが、これまた文字通りのスランプで、くびになって酒に浸っていて要領を得ない。その応答たるや、「エレヴェーターで最上階へ行って、よい窓を見付けて、飛び出せ」である。すべてに信頼を失った彼女は、Joyboy の職場を無意識に選んで自殺してしまう。

この自殺を知って驚いたのは、Joyboy であるが、恋人の死に対してよりも、自己の体面を考えて、のことである。それを何とか切り抜けんと Barlow を尋ね相談する。Barlow はここで、Aimée の死体を動物霊場の焼却炉の中に入れて処分してしまう。動物霊場のサーヴィスとして、年忌ごとに、Joyboy の所へ「あなたのエメちゃんは今日も天国で尻尾を振っています」という追善供養通知状が行くことになろう。

一方 Barlow は Joyboy との社会的体面の対抗意識から、無宗派の牧師の免許を

取るのだが、英国人としての名誉を汚すと、同じ英国人俳優 Sir Ambrose の忠告を受け入れて、これを最初の最後のお勤めとして米国を離れることを決心する。

見事な諷刺である。冷酷非情とも言えるこの諷刺、その上 Waugh 独得のパロディを交えた諷刺は、手離して笑って過せるものではない。人物が紹介されて行くにつれ、仮面を剥がされ、正体を暴露されてくる時、ただ笑えるのはそれが誇張され戯化されているからであって、その中にきらりと光るリアルな面に眼を向ける時、異様な shocking なものが我々の笑いを抑えてしまうのである。他人ごとにしてしまえば笑って過せる筈のこの笑いの中には、T. S. Eliot が「荒地」で歌った「恐怖」がにらんでいるのだ。

"There is shadow under this red rock,
(Come in under the shadow of this red rock),
And I will show you something different from either
Your shadow at morning striding behind you
Or your shadow at evening rising to meet you;
I will show you fear in a handful of dust." (l. 25-30)

Waugh はこの Eliot の引用を epigraph として *A Handful of Dust* という小説を書いているのであるが、彼も現代の恐怖に取り憑かれた一人なのである。ではその恐怖とは何であろうか。*The Loved One* において、Barlow は Aimée の自殺を知らされて、Joyboy に向って傲然とこう言い放っている。"Of course I never thought her wholly sane, did you?" (Penguin, p. 119). 彼女は正気でなかったと一体言い切れるだろうか。彼女の死の原因は、直接的そして表面的には、彼女の信頼していた身上相談の Slump に「よい窓を見つけて、飛び出せ」と言われて始めて死ぬ気持ちになったとも言える。「身投げしろ」と言われたから死んだのですと言った、一見反省のない発作的な自殺傾向とも見えるが、彼女の死はそれよりも、C. Hollis が言う様に必然的なものであったと見た方が妥当だ。Aimée はたとえ知性が足らぬ女性であるとはいえ、正気の世界なら恐らく正気の生活が送れたであろう人間なのである。正気のもものが正気でなくなることは、まさしく恐ろしいことだ。Aimée の死を作者はこう表現している。"She was far removed from social custom and human obligations." (p. 117). 誰だって死ねば社会慣習からも人間の義務から離れるのは当然には違いない。けれども Aimée の場合、彼女の死は、社会慣習そして人間的義務から余儀なく追い出されて、生きることを失ったための死なのである。人間としての支柱を失ったものは、必然的に死に導かれる。が単なる自殺では

なく、人間としての存在理由を失ったものの死なのであり、更に彼女が動物霊園の焼却炉の中にぶちこまれる姿に、生の恐怖の象徴的意義を認めない訳にはいかない。

C. Hollis は、彼の「Waugh 論」で次の様に言っている。

“most of us can remain human in human company, but few are strong enough to remain human in a sub-human company.”

(C. Hollis: *Evelyn Waugh*, p. 27)

確かにそうなのである。Waugh はこの様な人間以下の社会に人間が人間的であり得なくなっていく姿を Aimée を借りて見事に描いてみせるのである。Aimée は、いわば現代の激流の中に盲目的にこずきまわされる消極的人間である。この様な消極的受身の人間は、Waugh の第一作の小説 *Decline and Fall* (1928) の主人公 Paul Pennyfeather に既に見られる所だ。内気な大学生の Paul は僧職を志しているのだが、ある夜学生たちのストームに巻添えを食って、散々虐められ、ズボンを引ちぎられて中庭に逃げるが、運悪く見つけられて不謹慎な行動を咎められ退学になる。こういう時には、「先生でもやりな」と門番に言われて、俗に言うデモ先生になる。そのうち生徒の母親に金持ちの美人がいて、恋愛そして結婚一歩手前まで調子がよいのだが、最後の所でドロンをやられ、挙句の果てに、彼女が実は人身売買のボスであることが露見して、身代りに重罪監獄行きとなる所の全くの衰亡記にふさわしい主人公なのである。その他 *Vile Bodies* (1930) における、結婚を前にして常に見事だめになってしまう Adam Fenwick Symes にしても、*A Handful of Dust* (1934) における Tony Last にしても、いずれも Waugh 得意のこずきまわされる人物である。これ等の人物と同じ流れに立つ *The Loved One* の Aimée は、名が示す様に誰からかに愛されるのはよいとしても、自ら愛することもなく常にふりまわされているのである。自分の名前にしても始めは落付かぬ有様なのである。

“Yes, the Four Square Gorpel. That's why I'm called Aimée, after Aimée Macpherson. Dad wanted to change the name after he lost his money. I wanted to change it too but it kinda stuck. Mother always kept forgetting what we'd change it to and then she'd find a new one. Once you start changing a name, you see, there's no reason ever to stop. One always hears one that sounds better. But we always came back to Aimée between fancy names and in the end it was Aimée won through.” (p. 73)

映画の宣伝のために俳優 Juunita などは、役が変わるごとに、本名が勝手に変えられてしまうことが書かれているが、名前ならまだよいとして、それに応じて人間まで変えようと宣伝係は懸命になるに及んでは、少々滑稽になってくる。Aimée の場合も、名前のみならず、彼女の職業もまた転々としており、偶然「囁きの園」霊園に勤めるのである。この様にすべて受身的に動く Aimée は、恋愛においても、Barlow, Joyboy から翻弄され、最後には 身上相談からもこずきまわされてしまっている。恰も流れ作業で出来た一商品の様に、全く個性のない人間の扱いを受けている。Sir Hinsley の死においても同様だ。勤めの席が奪われてしまうのに反抗も出来ずに死んで行く事件は、ふざけた笑いを巻き起す前に、shocking なものを我々に与えている。それと同じ shocking な運命が、Aimée がこずきまわされていく中に、きりりきりり鋭い歯を光らせているのである。個性を外的な周囲にすっかり剥奪された人間とは、人間でありながら人間としての存在を放棄した、いわば規格品なのである。その操り人形の様な Aimée を作者はこう表現している。

“She presented herself to the world dressed and scented in obedience to the advertisements; brain and body were scarcely distinguishable from the standard product.” (p. 105).

宣伝という巨大な表面的機構の中に、人間が規格化された一商品と化している姿に、Waugh は諷刺のレンズを向けているのだ。アメリカなら何処に行っても同じに見えてくる女性、足とナイロン靴下とどちらが先に出来たか疑いたくなるこの異様な文明の下では、一商品と考えるのも無理はない。それは人間が神の姿に似ると言うよりは、機械の姿に似て来たのかも知れない。いずれにせよ、Aimée はまさしくこの様な社会が作った人間に他ならないのだ。

一方、Barlow という 実に破廉恥極まりない行動を平然とやってのける人物が、消極的な Aimée に対称的に描かれていることに注意したい。この様な積極的行動に出る人物も、Waugh 得意のタイプの人物なのだ。たとえば *Black Mischief* (1932) における Basil Seal がそれだ。名門の出身であり、放縦な生活に耽り、母親も彼には手を焼いているという厄介な人物だ。英国の政治に厭きて、アフリカのアセニア王国（架空国）の革命に興味を持ち、母親の反対も物ともせず、金の工面に母親のエメラルドの腕輪を失敬して、目的のアセニア王国に行く。ここでは革命後、「アセニア皇帝、サキュー族総酋長、ワンダの主、海の僭王、オックスフォード大学学士」という肩書きを持つ若い

Seth が支配している。彼は黒人軍隊の現代化を始めとし、博物館天文台の設立、更に産児制限の婦人啓蒙運動にいたるまで奇想天外な近代化に乗り出し、それを補佐する役が、彼の友人 Basil Seal なのである。この Basil と恋仲になっているのが駐在大使の令嬢 Prudence なのである。所が、Seth の祖父 Amurath 大王の実子 Achon を正統な帝位後継者と主張する Seth 反対派が現れ、産児制限運動の大ペイジントの日に革命を起し、Seth は亡命してしまう。Prudence も革命の混乱を避けて飛行機で脱出するが、故障で密林に不時着してしまう。Basil は Seth の後を追うが、Seth は既に死に、Moshu という所で Seth の葬儀に参列する。そこで土人達が酒を飲み踊り狂う中に、自分が Prudence を食ってしまった事を知るのである。この異常な自由奔放な活動をする Basil Seal は、*The Loved One* においては、取りも直さず、Aimée を焼却する Barlow なのである。Basil にしても、また Barlow にしても、我々が信じられない程に、現代の世相に無頓着に活動する厚顔な人並みはずれた人物であり、常識から見れば、奇怪な狂気じみた非実在の存在になって映ることは事実だ。詩集からせつせと詩を写して彼女に送り、Aimée が昇進すると言えば、そのお金で結婚してやろうと言い、恋敵に敗けまいとして、社会的体面のいい牧師の免許を取り、最後には Joyboy から金を巻き上げて、責任を全部相手に着せこんで、何の隠す所のない Barlow である。全く痛快な程に無責任な無良心な行動のために、かえって現代世相の馬鹿さ加減がますますはっきりされてくる。*Black Mischief* においても、Basil Seal が活躍すれば、そこには Seth のヨーロッパ現代文明の表面的輸入の空虚さが明確にされるし、*The Loved One* でも、Barlow が突飛な行動をすれば、そこには反動的にアメリカの物質文明崇拜の軽薄愚劣さが浮彫りされるのである。彼等は現代世相を相手にした皮肉な立場に立っているのである。

これ等の主人公達の軽薄な巧智に長けた振舞は、それだけでも落語の悪人の話に通ずる諸譴性を持っているのだが、その馬鹿げた破廉恥な行動は、また稚気あふれたものである。Barlow が Aimée をいじめ、Joyboy にむきになって屈辱を与える行為は、子供なら許せる全くあきれた行為である。この様な狂気じみたものに対する親近感には、Basil Seal や Barlow にも横溢しているのだが、これが Waugh の好む所なのだ。*Mr. Loveday's Little Outing* (1935) における精神病患者の娘殺しにしても、*Love Among the Ruins* (1953) の「個人的レクリエーションの教師を訓練する教師をまた訓練する教師をさらに訓練する所」にやとわれ放火をする Miles Plastic にしても、Waugh の描く人

物には狂氣的親近感を感じる。Aiméeの死体を平然と処理し、Poeの詩 *To Helen* を自作の詩の如く読む Barlow は、まず正気の沙汰とは申されない。

が、この様な野蛮な残酷な狂気じみた行為は、また作者の無邪気な悪戯好きの子供らしさの自由な想像的表現とも見れるのである。Waugh はそういった子供ばい主人公を好んで描いている。例えば、*A Handful of Dust* の主人公 Tony Last は中年の男でありながら、Chums 誌附録の大砲が煙と煙を出している大型戦艦の色彩写真を自分の部屋に飾っているし、また *Brideshead Revisited* (1945) では、貴族の放蕩息子で酒乱の Sebastian が玩具の熊 (teddy bear) を後生大事に手離さず、過ぎし学生生活の思い出に耽けるのである。その意味で、*Black Mischief* の mischief は、恋人を食ってしまう野蛮な狂気じみた稚氣あふれる「悪戯」だと解される。無責任な放縦な生活は、Waugh にとっては失われた青年時代へのノスタルジアなのである。このノスタルジアが全く奇想天外に、想像と現実とを取り違えて登場してくるから面喰ってしまうのである。それには、

"The lunatic, the lover and the poet
Are of imagination all compact." (V. I, ll. 7-8).

といった *A Midsummer Night's Dream* の言葉を引用すれば許されるかも知れない。が Waugh 好みの将棋の定石は単にそれだけのことではない。狂気じみたものへの親近性を同情的に描く Waugh は、この様な稚氣あふれた行為が、現代においては既に空想においてのみしか可能にならぬこと、と同時に純真な子供時代の意義を感傷的に強調している様である。がそんな勝手なことが現実の大人の世界にあっては、それこそたまったものではない。しかし Waugh にしてみれば、彼の処女作になった Rossetti の研究が示す様に、過去の審美の世界への思慕と言ったロマンチックな精神が、諧謔精神と共に忘れられずに現れるのである。Gothic の夢を持つ青年時代、そして悪戯好きの学生時代の自然な思い出が、稚氣ある想像をとまって開放されるのである。ここに Waugh の現代に抗う一面がありありと示されているのである。

Bergson によれば、笑いには「人に屈辱を与える意図があり、従って矯正する力」を持つ。その意味で笑いは絶対に正しいものとは限らない。がこの残酷な程に屈辱を与えて喜ぶ悪趣味ぶりは、我々にも見かける所だが、*The Loved One* における Barlow の Joyboy に対する態度は正しくそれだ。最後まで Joyboy をいじる Barlow は、酷ではありながらも笑いを誘うに十分であ

る。が相手に屈辱を与える Waugh の悪趣味ぶりは、先程述べた彼の現代の嫌悪と同時に、過去への愛着に連なる英国人特有の優越感から来ているものである。*Black Mischief* においては、白人の黒人に対する人種的優越感が見られるし、*The Loved One* においては、英国人の米国人に対する面子の優越感が見られる。Barlow は Aimée との関係を Henry James を持ち出してこう傲然と言うのである。

“Through no wish of my own I have become the protagonist of a Jamesian problem. All his stories are about the same thing—American innocence and European experience.” (p. 96)

Sir Ambrose がいやに ‘face’ (面子) を持ち出し、無理をしても英国人 Sir Hinsley の葬儀を盛大にしたり、英国人であることを意識せよと Barlow に再三忠告を与え、英国に送還させてしまうのも、同じ英国人優越感なのである。この英国人特有の優越感こそ、いわゆる Snob 根性なのである。それは社会的体面を保持せんとけなげにも躍起になる Joyboy も、この英国伝統的 Snob に会ってはものの数に入るものでない。

この Snob 精神こそ、Waugh が求める失われし安定の時代への愛着心なのであり、混乱の現代嫌悪の逆手攻撃でもあるのだ。暇さえあれば詩集を開き、Tennyson の *Tithonus* の一節を繰り返し読む Barlow にしても、また H. Monro が、Poetry Bookshop で詩を朗読した時代を回顧する Sir Francis にも、現代の不満そして嫌悪があると同時に、伝統的保守の牙城を固執する姿が見られるのである。*Scott-King's Modern Europe* (1946) において古典語の教師で Bellorius という詩人(架空)の研究家が招待されて見る現代国 Neutralia (架空国) から帰って、こう言うのである。

‘I think it would be very wicked indeed to do anything to fit a boy for the modern world.’

‘It’s a short-sighted view, Scott-King.’

‘There, head master, with all respect, I differ from you profoundly. I think it the most long-sighted view it is possible to take.’

(Penguin, p. 248)

彼の笑いは、我執的な時として鼻持ちならぬ Snob 精神を利用することによって生み出そうとする裏をこずく様な毒の含んだ笑いなのである。批評家の父を持ち、Alec Waugh (1898—) という通俗作家を兄に持つ恵まれた中産階級

の家庭に育った彼が、貴族の娘と結婚し、フィンを嗜み、18世紀の建築書や19世紀の着色石版書の蒐集を趣味としている審美家であることからしても、彼が英国伝統的上流社会に懐けるのも無理からぬ所だ。しかもラジオを source of the nuisance (p. 90) と言ったり——これは *The Odeal of Gilbert Pinfold* (1957) において被害妄想の形で再現されているのだが——する時代感覚のずれた偏癪ものの存在であることを自ら公言して憚らないのである。そのため多くの批評家たちから、鼻もちならぬ Snob として相当批判のあった所であるが、こういった存在があることは、逆に理性を失った現代に対する批判にもなっているのだ。T. S. Eliot が Anglo-Catholic に転向したのと同じく、Waugh も 1930年に Roman-Catholic に回心しているのだが、カトリック国でない英国でカトリックになることも、或いはこういった個人的趣味が秘んでいるのかも知れない。

諷刺とはある一面の強調を手段として、道徳なり社会なりに矯正を意図する笑いの批評なのである。Waugh の批評精神によって立っている所は、そういった確信のある Snob 精神に裏付けされた宗教である様だ。Aimée の様にこずきまわされる知能の低い受身的存在を描き出すことも、また軽薄とはいえ稚氣あふれた活動をする Barlow を十分活躍させるのも、煎じ詰めると、宗教的伝統を失った現代に対する批判精神があるからであり、また神の恩寵を失った現代人に対する抗議が生み出したものなのである。その点 *The Loved One* は、宗教を失った現代人の死に対する態度を思い切って揶揄した真面目な作品なのである。C. Hollis は、

“The point of the book, if we retranslate it from fiction into propositions, is the study of the attitude of modern, irreligious man towards death, and as such it is far from a jeu d'esprit but rather one of the most serious of all Mr. Waugh's works.” (Ibid., p .25).

と言っている。死に対する恐怖を払いのけて生活を安楽にしようとする安易な実利的考え方は、成程、一見無意味なものではない様に見える。が死を考えるのは人間において他にない筈だ。逆に言えば、死こそ人間的な意識を可能にさせてくれるものだ。その死を社会的体面の道具として企業化し、金銭的利害と結びつけるに至っては、これは十分考え直す余地のある所だ。霊園の企業化、死人微笑、死の衣裳等は、かえって神聖視されるべき死を滑稽なものに化し、しかも本来の死の意義からはるかに遠ざかってしまっている。死を神聖視しないことは、戦場におけると同然、またそうならば、動物の死と混同されて

も不思議ではない。Aimée が死んで、動物霊園で火葬に付され、しかもそれを loved one (p. 127) と小文字で扱われることになったのは、Kafka の変身と同じく、人間が人間としての存在を認められなくなったことを意味するものだ。人間を神と動物との間に立たせる時、人間が人間でなくなることは、Pascal を引き合いに出さずとも、動物的状态以外に考えられない。伝統的信仰に立つカトリシムズを彼が信じたことは、ここに、神の恩寵から断絶した罪惡に満ちた人間に対する一つの批判を確實にするものである。「囁きの園」霊園にカトリックの墓がないことも、カトリックにおける死の重要性を裏書きしているものだ。キリスト教は本質的に死の宗教であり、死を通しての生の宗教なのである。ここに Waugh の辛辣な諷刺は、恩寵のない滑稽の悲惨さを描き出すことによって、真面目さを一段と加えて行くのである。

科学主義物質文明の過信による人間個性の剝奪、または個性の画一化の現象こそ、そして人間の動物的変身の状態こそ、まさに現代の悲劇なのである。現代の危機は再三繰り返えされている所だが、肉体面にもまして、精神面において我々を強迫している恐怖こそ最も警戒せねばならないものなのだ。Waugh はこの作品に Anglo-American Tragedy と命名している様だが、「囁きの園」霊園そして Joyboy にいたっては、全くの「アメリカの悲劇」の主人公なのである。いやすべてのものが悲劇の主人公であることを教えているのが、この作品である。この作品は現代に対する判断が、可成不十分な一方的な見解に立つものになってはいらぬものの、諷刺を生かした Waugh の現代雄悪の人生戯評と安定した過去への憧憬の精神は、見事融合しており、我々の文学趣味を楽しませるに足だけの価値は十分に持っている作品だと言えよう。
